

「お産の学校」講習会終了にあたって

杉山次子

お産の学校代表

1980年に始まった「お産の学校」講習会は、以来17年間にわたりたくさんの方々の協力のもと100回の開講を達成した。

折からの自然出産志向から、受講希望者は多かったが、多人数を対象にした講習会では産む人たちが個々のニーズにきめ細かく対応することは、難しい状況になってきた。また、主催者側と受講者たちの年齢差が、この講習会の教育の有効性を損なう懸念も出てきた。こうした事情から「お産の学校」は、新たな出産準備教育の場ができることを期待し、100回を機に講習会を終了することにした。

1980年の講習会発足当時、この欄に「ラマーズ式分娩はブームだが、うたかたと消えるか大地に根付くかは、今後の展開だ」と書いた。いま、講習会を終了するにあたり、当初の目標は達成されたのかなど検証してみたい。

「お産のイメージを明るくし、お産を女性の主体的な営みに」が第1の目標だった。確かに、不安や恐怖のイメージは軽減されたが、子産みの喜びだけが強調され出産の実態から目をそらし、積極的な準備がないまま「らくなお産」を望む女性たちも目につく。「連れ合いの参加」は、最も達成され、過半数がカップルで受講していた。「赤ちゃんの人権も大切に」は、母子同室や母乳育児への関心は高まったが、まだまだ納得できる状況には至っていない。

また、「産む側と介助する側のいい関係」では、妊産婦と助産婦間の自然出産にむけた一体感は築かれたものの、

医師においては一部の理解が得られたのみでいまだ管理出産が本流と思える。そして最後の目標、講座の「質の良さ」の継続は、その目標を貫き通すことができたと確信している。全体として、「お産の学校」の所期の目標はある程度達せられたと思っている。

しかし、最近のマタニティ雑誌の読者調査などではラマーズ法を知っている者はほぼ100%だが、自分で実施したいとする者は34.1%であり、

その他の自然出産法はもっと少ない希望である。自然出産を希望し、母子とも安全で快適な出産を経験しようとするなら、積極的な学習は必要不可欠の前提であると思えるが、出産前の準備教育への関心は意外に低い。準備することがただ面倒なだけなのか、あるいは出産で格別な何々法といったような準備にこだわるこ

とがもはや「自然」ではないと考えるのか、そのあたりは、理解しかねている。

ともあれ、急激に進行した管理出産に対し「産む女こそ主役だ」と叫んだ熱気は沈静化した、その主張は定着しつつある。自律出産の希望は、自然出産志向のある限り衰退することはない。「自然に産みたい」という女性たちと、援助する側が共に学び合える出産準備教育の重要性を確認しつつ、永年のご協力・ご指導に感謝したい。

（「お産の学校」運営委員では、相談教材頒布などの活動は継続予定です。また12月22日の「自然なお産を求めて」トークと出版記念パーティーに多くのご参加を願っています）。

